

長野県植物誌改訂調査で確認された県新産種の紹介 VI

藤田 淳一*

1 はじめに

コロナ禍以降も社会が大きく揺れ動く中、「日常」という言葉がどれだけ重要かつ大切なものであるか、日々噛み締めながら標本整理にあたっている。長野県にはどのような植物が生育しているのか、その実態を少しでも明らかにしたいという願望はある。しかし、身近な普通種と思しきものも、よく調べると想像以上に難しく、認識している常識と実態の間にはまだまだ乖離、未解明なものが多く、一度常識を捨てなければならぬことが多い。今回は、そういう意識を持って、普通種として認識されているものが、認識違いである種、既存記録が標本を伴わない等、不確かと考えられる種を中心に紹介する。

2 県新産種

以下に新産種を示す。また、図 1～16 に標本写真を示す。図中の標本番号のうち、TCCN は筆者の個人番号、OAM は大田市立大町山岳博物館、「安曇野」は豊科郷土博物館である。現段階で公的な機関に寄贈していない標本は追って寄贈する。

(1) アイノコマイヅルソウ (クサスギカズラ科)
Maianthemum x intermedium Vorosch.

安曇野市堀金烏川の林道沿いの尾根上において生育を確認した。ヒメマイヅルソウ *Maianthemum bifolium* (L.) F.W.Schmidt と マ イ ズ ル ソ ウ *M. dilatatum* (Alph.Wood) A.Nelson et J.F.Macbr. の推定雑種である。確認時、尾根上というやや乾燥した環境と、花茎につく葉が細いことなどからヒメマイヅルソウと考えたが、根生葉の丸みが強いため、マイヅルソウとした。後日、よく確認したところ、葉裏上に毛が散生し、葉縁に顆粒状の不明瞭な鋸歯が認められるというヒメマイヅルソウの特徴と、根生葉の丸みが強く、小花柄が短いというマイヅルソウの特徴を有していることから、ヒメマイヅルソウとマイヅルソウの雑種と考えた。標本を採集した群落は、花つきが良かったが、後日同じ再訪したところ、全

く結実していないことから稔性はないとみられる。いろいろな場所で、マイヅルソウともヒメマイヅルソウともつかないものは多く、無理矢理どちらかに振り分けられてきた可能性がある。

(2) ショクヨウガヤツリ (カヤツリグサ科)
Cyperus esculentus L.

大町市平の休耕畑に本種が群生しているのを確認した。国外外来種であり、同じく国外外来種の近縁種ホソミキンガヤツリ *Cyperus engelmannii* Steud. によく似ているが、瘦果を包む鱗片の茶色みが強く、多年生のため、地下茎を生じる点が異なる。本種は、一度進入すると、栄養繁殖で一気に増加するため、暖地を中心に農業の厄介者とされている。ショクヨウガヤツリに限らず、*Cyperus* という属自体、あまり詳しく観察されていないため、実はすでに身近な場所に生育している外来種、希少とされているが、身近な環境にごく普通に生育する種などが潜んでいると考えられる。

(3) キタメヒシバ (イネ科)
Digitaria ischaemum (Schreb.) Schreb. ex Muhl.

安曇野市穂高の農耕地の未舗装路に生育しているのを確認した。現在、人里でアキメヒシバ *Digitaria violascens* Link と認識されているものの多くは本種である。キタメヒシバは、アキメヒシバとは、小穂がやや大きく、小穂の第 1 苞穎が存在する点、花序の総が明らかに太い点、葉に青みが強い点等が異なる。もともとキタメヒシバは極めて希少なイネ科草本であるが、近年急速に増加しており、未舗装路のわだちや踏み跡のカゼクサ *Eragrostis ferruginea* (Thunb.) P.Beauv.、オオバコ *Plantago asiatica* L. が生育するような立地に群生している。この急増しているキタメヒシバは、外来系統の可能性もある。本種の県内の既存記録は、霧ヶ峰（大塚ら、2017）にあるものの、標本記録にあたることができないため、ここで挙げておく。なお、アキメヒシバは滅多に出会うことがなく、過去 10 年で筆者が採集したのは軽井沢町の 1 点（TCCN23-0773）のみである。

(4) コネズミガヤ (イネ科)

* 藤田淳一 長野県松本市
Mail: aegithalos-caudatus@celery.ocn.ne.jp

Muhlenbergia schreberi J.F.Gmel.

松本市入山辺の林道沿いにおいて生育を確認した。本種は、目立たない国外外来種であるが、シカの嗜好植物であるため、シカが他種を食べ尽くしていくと、林道沿いに群生するようになり、認識できる。既存の県内記録では、旧・日義村（現・木曾町）で目視記録が存在するものの（長野県植物誌資料集作成委員会、2005）、結実していないものに拠るため、ここで挙げておく。筆者は、南木曾町においても本種を採集しているため（TCCN21-0957）、すでに県内に点在している可能性がある。

（５）コイチゴツナギ×ツクシズメノカタビラ（イネ科）

Poa compressa × *P. crassinervis*

塩尻市大字片丘の林道沿いにおいて生育を確認した。コイチゴツナギ *Poa compressa* L. と ツクシズメノカタビラ *P. crassinervis* Honda の推定雑種である。今回確認したのは、茎や葉鞘が平らに潰れたコイチゴツナギのようであるが、ほとんどの小穂が不稔であることから、他種との雑種と考えられた。同時に小穂の第１苞穎が外反し、護穎の脈上に伏毛が密生するというツクシズメノカタビラの特徴がみられたことから、両種の雑種とした。近年、ツクシズメノカタビラが国内外来種という形で人里や山間部にまで分布を拡大しており、近縁種との推定雑種もみられつつあるため注意が必要である。

（６）ミヤマチョウジザクラ×オオヤマザクラ（バラ科）

Cerasus apetalata var. *apetalata* × *C. sargentii* var. *sargentii*

安曇野市堀金烏川の林道沿いにおいて生育を確認した。ミヤマチョウジザクラ *Cerasus apetalata* (Siebold et Zucc.) Masam. et S.Suzuki var. *apetalata* とオオヤマザクラ *C. sargentii* (Rehder) H.Ohba var. *sargentii* の推定雑種である。2022年に葉のみの状態で標本を採集し（TCCN22-0950）、葉の鋸歯が非常に深い点や、葉裏に硬い毛が密生する点からミヤマチョウジザクラを片親とした雑種と考えた。この標本をサクラの分類が専門の富山県中央植物園の大原隆明氏に同定を依頼したところ、ミヤマチョウジザクラとオオヤマザクラの雑種であろうとのコメントを頂いた。2023年の花期に確認に行くと、ミヤマチョウジザクラに似るが、花弁が大きく、ピンク色というオオヤマザクラの特徴も有することから、ミヤマチョウジザクラとオオヤマザクラの雑種であると確

信した。生育地には多数の本推定雑種が生育している一方、両親種は、全くみられなかった。このような事象は、近縁種の分布境界によくみられると思う。

（７）クマモミジイチゴ（バラ科）

Rubus crataegifolius × *R. palmatus* var. *coptophyllus*

塩尻市大字下西条の林道沿いにおいて生育を確認した。クマイチゴ *Rubus crataegifolius* Bunge とモミジイチゴ *R. palmatus* Thunb. var. *coptophyllus* (A.Gray) Kuntze ex Koidz. の推定雑種である。一見モミジイチゴそのものであるが、葉の葉脚が深く貫入し、頂羽片の切れ込みが明瞭であり、鋸歯がやや深い点、花弁に粗い鋸歯が入る点、生時葉がモミジイチゴよりも厚い点からクマイチゴとの雑種と考えた。また、同一個体をみていると、夏季に枝から大きなクマイチゴに似た葉を展開することも確認している。本推定雑種は、長野県植物誌補遺において挙げられていたものの（清水、2004）、その後、松田により、一度訂正・削除されたもの（松田、2019）である。

（８）ヤエノモミジイチゴ（バラ科）

Rubus palmatus Thunb. var. *coptophyllus* (A.Gray) Kuntze ex Koidz. f. *coronarius* H.Ohba

上伊那郡辰野町大字横川の林道沿いにおいて生育を確認した。モミジイチゴ *Rubus palmatus* Thunb. var. *coptophyllus* (A.Gray) Kuntze ex Koidz. の花弁の多い八重咲きの品種である。このような変異は *Rubus* には、ごくありふれたものであるが、品種まで拾う努力をすると自ずと認識するようになるため、ここで挙げておく。

（９）モミジイチゴ×ミヤマニガイチゴ（バラ科）

Rubus palmatus var. *coptophyllus* × *R. subcrataegifolius*

安曇野市堀金烏川の林道沿いにおいて生育を確認した。クマイチゴ *Rubus crataegifolius* Bunge とミヤマニガイチゴ *R. subcrataegifolius* (H.Lév. et Vaniot) H.Lév. の推定雑種である。クマイチゴに酷似するが、葉の羽片が丸みを帯びており、葉全体の概形が三角形になる点（クマイチゴは五角形）、花柄が細長い点など、ミヤマニガイチゴの特徴を有している。確認した林道にはクマイチゴ、ミヤマニガイチゴが多数生育しており、本推定雑種は数個体とごくわずかであった。

（１０）コシジタネツケバナ（アブラナ科）

Cardamine niigatensis H.Hara

下水内郡栄村大字堺の雪解け由来の細流沿いにおいて生育を確認した。細流沿いには本種が多数群生していた。本種は、他の *Cardamine* に比べて、茎葉、根生葉の羽片の分岐が明らかに少なく、茎の基部からよく分枝し、非常にみずみずしく触れると茎が簡単に折れてしまうため、容易に同定可能である。毎年開催している中部北陸勉強会において、富山県、群馬県に本種が生育しているとの情報や、形態的特徴について説明を聞いた際に、過去に栄村で目撃した記憶があったため、2023年に現地を訪れて確認した。

(11) コシジタネツケバナ×オオバタネツケバナ (アブラナ科)

Cardamine niigatensis × *C. scutata*

下水内郡栄村大字堺の雪解け由来の細流沿いにおいて生育を確認した。コシジタネツケバナ *Cardamine niigatensis* H.Hara とオオバタネツケバナ *Cardamine scutata* Thunb. の推定雑種である。前述のコシジタネツケバナの群生地周辺に数個体が生育していた。コシジタネツケバナに比べ茎の分岐は不明瞭で直立し、茎葉、根生葉の羽片の分岐がやや多い。コシジタネツケバナと周辺に生育していたオオバタネツケバナとの中間的な形態を有している。*Cardamine* は容易に種間交雑をするため、ある種の群生地周辺には他種との雑種がよくみられる。

(12) カライタドリ×オオイタドリ (タデ科)

Fallopia forbesii × *F. sachalinensis*

岡谷市高ボッチ山の林道沿いにおいて生育を確認した。国外外来種であるカライタドリ *Fallopia forbesii* (Hance) Yonek. et H.Ohashi と当該地では国内外来種のオオイタドリ *F. sachalinensis* (F.Schmidt) Ronse Decr. の推定雑種である。イタドリ *F. japonica* (Houtt.) Ronse Decr. とオオイタドリの雑種であるアイイタドリ *F. x bohemica* (Chrték et Chrtková) J.P.Bailey に酷似するが、花柄の基部寄り 1/5 くらいのところに関節が生じるカライタドリの特徴がみられる (イタドリの場合花柄の基部寄り 1/3 くらいのところに関節を生じる)。本推定雑種は、林道沿いなどに両親種が緑化材として吹き付けられている場所で時々みられ、木曾郡木祖村 (TCCN23-0731)、南佐久郡佐久穂町 (TCCN23-0948) でも生育を確認している。

(13) ハイミミナグサ (ナデシコ科)

Cerastium brachypetalum Pers.

塩尻市大字片丘高ボッチ山の林道沿いにおいて生育を確認した。国外外来種であり、国内では、愛知県の瀧崎吉伸氏が認識し、本種の和名を提唱した (瀧崎, 2018)。葉が狭卵形で日本のミミナグサ *Cerastium fontanum* Baumg. subsp. *vulgare* (Hartm.) Greuter et Burdet var. *angustifolium* (Franch.) H. Hara よりも細く、茎の基部が倒伏して発根するため、全草の様子は、こんもりとした塊状になる。花卉は幅が広い、花卉の間の隙間がほとんどない。長野県ではかなり古くから生育しており、高原の牧草地ではすでに普通種である。筆者は、20年以上前から認識していたものの、海外の文献をあたるのが億劫であったため、勝手に「高原ミミナグサ」と呼んで放置していたものである。

(14) オオミミナグサ (ナデシコ科)

Cerastium fontanum Baumg. subsp. *vulgare* (Hartm.) Greuter et Burdet

塩尻市大字下西条の林道沿いにおいて生育を確認した。ヨーロッパ原産の国外外来種である。日本のミミナグサ *Cerastium fontanum* Baumg. subsp. *vulgare* (Hartm.) Greuter et Burdet var. *angustifolium* (Franch.) H.Hara とは変種関係とされ、よく似ているが、ミミナグサからは、花序の枝が広く散開する点、花序の苞葉の辺縁部が膜質となる点、茎や花序枝に腺毛が密生する点が異なる。本種は、県内の市街地、農地、林道などにごく普通にみられる。日本のミミナグサは、古い畦畔、明るい社叢林などに生育地が限定され、絶滅寸前と考えられる。現状、オオミミナグサ subsp. *vulgare* という認識をしているが、厳密には、かつて、原寛が提唱したケミミナグサ *C. caespitosum* var. *glandulosum* Wittgen に該当すると思われる。しかし、ケミミナグサに該当する現在の学名が不明で、ヨーロッパでの認識などさらに調べる必要があることは申し添えておく。

(15) シュッコンウンラン (新称) (オオバコ科)

Linaria purpurea (L.) Mill.

安曇野市堀金烏川の林道沿いにおいて生育を確認した。本種は、県内の高原や市街地などに広く生育する多年生の国外外来種である。紫色やクリーム色の花を咲かせるもので、「ムラサキウンラン」と呼ばれ、筆者もあちこちでムラサキウンランの和名を使用してきた。しかし、一部図鑑や、Yリストではムラサ

キウンランの学名を *Linaria bipartita* (Vent.) Willd. としている。*L. bipartita* は、ヒメキンギョソウと呼ばれ、一年生草本で花が大きい園芸植物である。和名の混乱の問題や *L. purpurea* の学名を正確に拾うことができるよう、*L. purpurea* に対してシュッコウンランという新称を与えて、取り違い問題に終止符を打ちたい。本種のみならず、外来の *Linaria* は、長野県内に数種類がすでに生育しており、その正体を突き止めるのには時間が掛かりそうである。

(16) タイアザミ×スズカアザミ (キク科)

Cirsium comosum × *C. suzukaense*

大桑村大字野尻の道路沿いにおいて生育を確認した。タイアザミ *Cirsium comosum* (Franch. et Sav.) Matsum. とスズカアザミ *C. suzukaense* Kitam. の推定雑種である。スズカアザミに酷似するが、頭花がタイアザミのように太く、総苞片には腺体がほとんど発達しない。本誌 56 号にて筆者が言及している通り、*Cirsium* は種間雑種と考えられるものがありふれており、枚挙に暇がなく、1 つ 1 つ拾い上げて新産と称するのは気がひける。しかし、タイアザミ×スズカアザミはごく一部の地域にみられるまれなものではなく、上伊那、下伊那、木曽地域に広く普通に生育しており、両親種のどちらかに無理矢理振り分けるのは無理があるため、ここで挙げておく。

3 おわりに

2023 年からは、認識違いと考えられた種、記録が不確かと考えられる種を拾い上げつつ、積極的に国外外来種を調べようと意気込んで調査に臨んだ。オオミミナグサのように未だに完全な解決に至らない種についても、実は普通に生育していると思われる在来種が外来種だったということを発信するために道半ばで発表せざるをえないものを含め、外来種問題は奥が深く、ややこしい。これらを少しずつでも解決するために文献の精査、県外との情報交換をしていきたい。

4 謝辞

富山県中央植物園の大原隆明氏には、サクラの推定雑種の同定及び、コシジタネツケバナについて、群馬県立自然史博物館の大森威宏氏にはコシジタネツケバナについて、有用な情報、助言を頂きました。愛知植物の会の瀧崎吉伸氏には、ハイミミナグサに

関する情報をご提供頂きました。大町市立大町山岳博物館 (OAM) の標本登録にあたっては、千葉悟志氏に、豊科郷土博物館 (安曇野) の標本登録にあたっては、松田貴子氏にお世話になりました。ここに記して御礼申し上げます。

5 引用・参考文献

- 藤田淳一 (2023) 長野県植物研究会誌 No.56 長野県植物誌改訂調査で確認された県新産種の紹介 V, 長野県植物研究会 :111-118
- Hara, Hiroshi (1941) Observation ad Plantas Asiae Orientalis (XVII). Journal of Japanese Botany Vol.17 No.1:17-18
- 松田行雄 (2019) 長野県植物研究会誌 No.52 長野県植物誌補遺 (7) クマモミジイチゴの訂正, 長野県植物研究会 :127
- 長野県植物誌資料集作成委員会 (2005) CD-ROM 長野県植物誌資料集 (普及版)
- 鳴橋直弘・長谷川匡弘 (2020) 大阪自然史博物館 収蔵資料目録第 51 集 バラ科キイチゴ属 標本目録, 大阪自然史博物館
- 長田武正 (2002) 増補 日本イネ科植物図譜 (オンデマンド版), 平凡社
- 大塚孝一・星山耕一・藤田淳一・尾関雅章・石田祐子 (2017) 長野県植物目録, 長野県植物目録編纂委員会
- 清水矩宏・森田弘彦・広田伸七 (2001) 日本帰化植物写真図鑑, 全国農村教育協会
- 清水建美・監修 (1997) 長野県植物誌
- 清水建美・編 (2004) 長野県植物研究会誌 No.37 「長野県植物誌」補遺 (7), 長野県植物研究会 :73-80
- 杉本順一 (1973) 日本草本植物総検索誌<単子葉編>, 井上書店
- 杉本順一 (1965) 日本草本植物総検索誌<双子葉編>, 六月社
- 瀧崎吉伸 (2018) くさなぎおごけ - 愛知植物の会会報 - No.13 帰化植物の話題 2018, 愛知植物の会 :5-18
- 植村 修二・清水 矩宏・水田 光雄・森田 弘彦・勝山 輝男 (2010) 日本帰化植物写真図鑑, 第 2 巻, 全国農村教育協会
- 米倉浩司 (2017) 改訂新版 日本の野生植物 4 タデ科, 平凡社 :84-104
- 米倉浩司・梶田 忠 (2003-) 「BG Plants 和名一学名

インデックス」(Ylist, <http://ylist.info>)(2024 年
1 月 5 閲覧) Hara, Hiroshi(1941)Observation

ad Plantas Asiae Orientalis(XVII). Journal of
Japanese Botany Vol.17 No.1.:17-18



図1 アイノコマイヅルソウ (長野県安曇野市堀金烏川 安曇野 13635/TCCN23-0332 2023年6月3日)



図2 ショクヨウガヤツリ (長野県大町市平 OAM13714/TCCN23-0609 2023年8月6日)



図3 キタメヒシバ (長野県安曇野市穂高 安曇野 13803/TCCN23-0932 2023年9月30日)

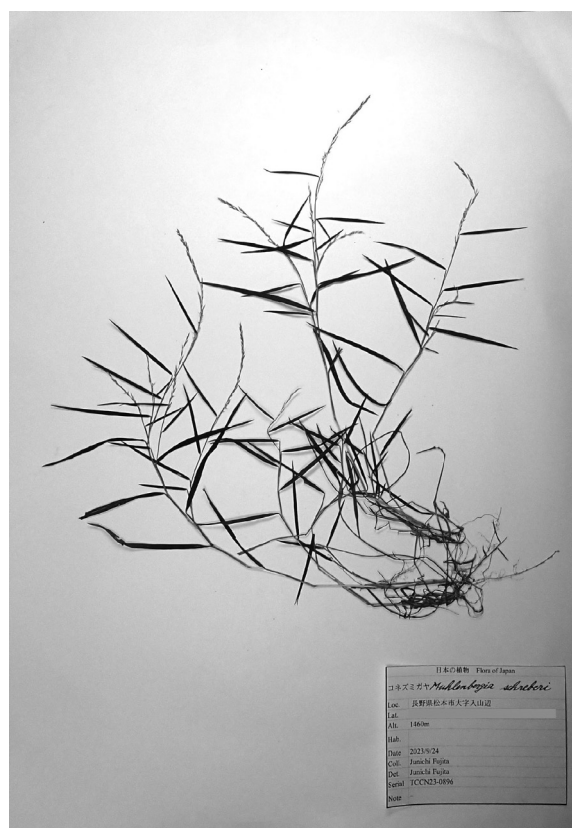


図4 コネズミガヤ (長野県松本市大字入山辺 TCCN23-0896 2023年9月24日)



図5 コイチゴツナギ×ツクシスズメノカタビラ
(長野県塩尻市大字片丘 TCCN23-0404
2023年6月18日)



図6 ミヤマチョウジザクラ×オオヤマザクラ
(長野県安曇野市堀金烏川 安曇野 13603/
TCCN23-0115 2023年5月3日)



図7 クマモミジイチゴ(長野県塩尻市大字下
西条 TCCN23-0080 2023年4月28日)



図8 ヤエノモミジイチゴ(長野県上伊那郡辰
野町大字横川 TCCN23-0090 2023年4
月29日)



図9 クマイチゴ×ミヤマニガイチゴ (長野県安曇野市堀金烏川 安曇野 13654/TCCN23-0439 2023年6月24日)



図10 コシジタネツケバナ (長野県下水内郡栄村大字堺 TCCN23-0038 2023年4月16日)



図7 クマモミジイチゴ (長野県塩尻市大字下西条 TCCN23-0080 2023年4月28日)

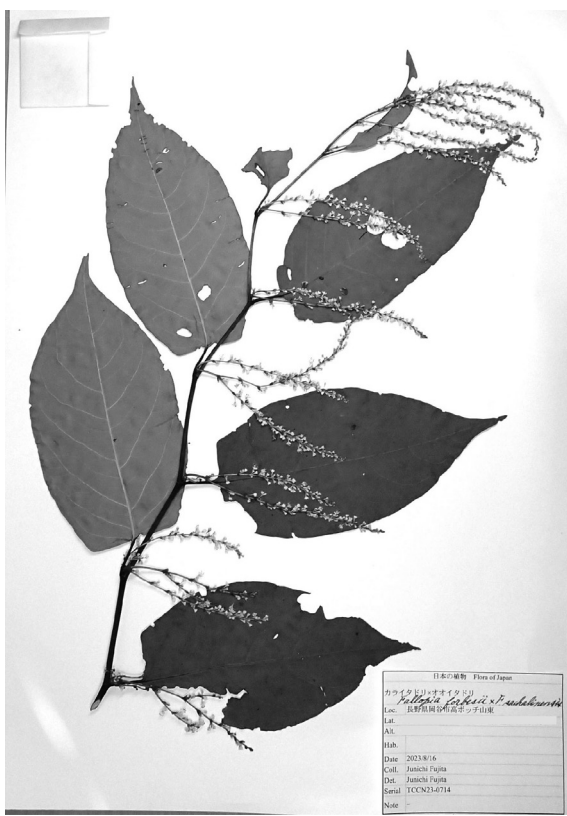


図8 ヤエノモミジイチゴ (長野県上伊那郡辰野町大字横川 TCCN23-0090 2023年4月29日)

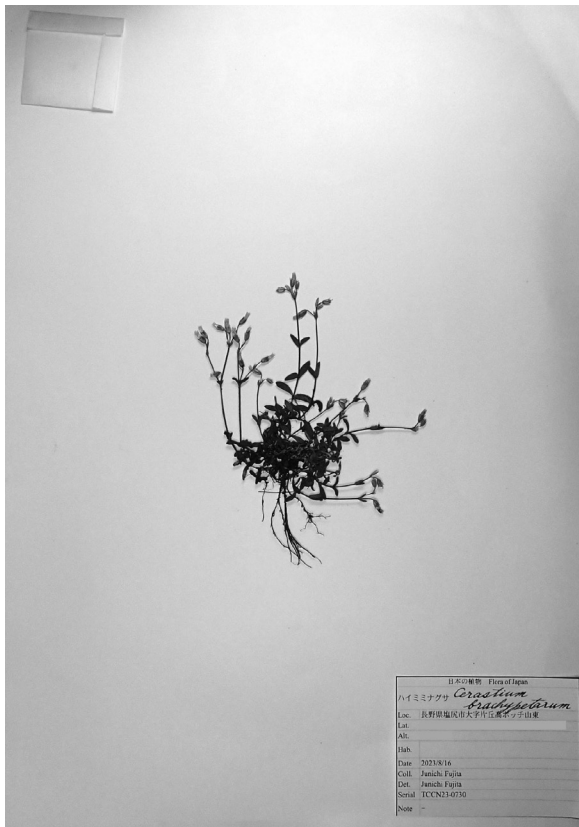


図 13 ハイミミナグサ (長野県塩尻市大字片丘高ボッチ山 TCCN23-0730 2023 年 8 月 16 日)

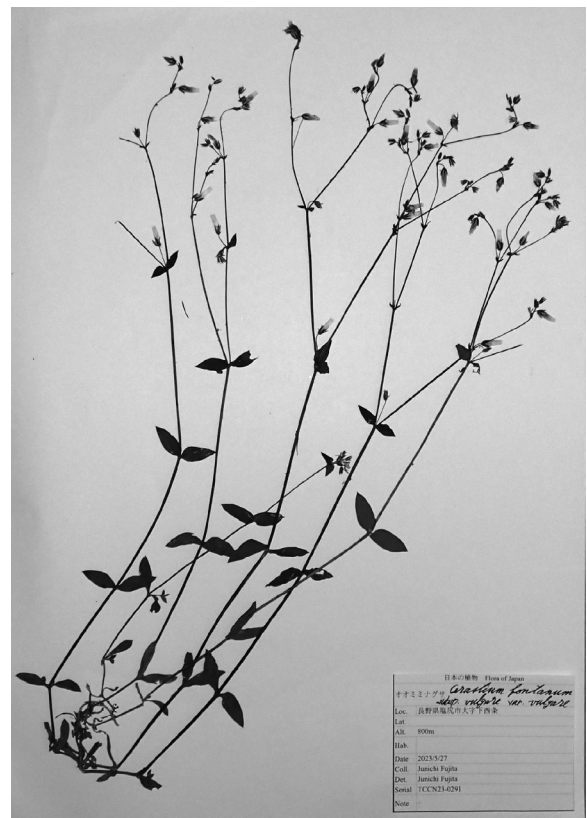


図 14 オオミミナグサ (長野県塩尻市大字下西条 TCCN23-0291 2023 年 5 月 27 日)



図 15 シュッコウンラン (長野県安曇野市堀金烏川 安曇野 13702/TCCN23-0594 2023 年 7 月 29 日)



図 16 タイアザミ×スズカアザミ (長野県大桑村大字野尻 OAM13705/TCCN17-0529 2017 年 11 月 4 日)

